

周到なる卑俗さ——「痛ましい事件」 の語りについて

豊 田 宣 是

Scrupulous Meanness : The Narrative of “A Painful Case”

Noriyuki Toyoda

In the letter to his publisher, explaining the intention of *Dubliners*, James Joyce told that he wrote it in a style of “scrupulous meanness”. I regard it as a kind of oxymoron and I explore how it works in “A Painful Case”. First, I examine the “scrupulous meanness” represented in the description of James Duffy, a leading protagonist, and his room. Secondly, making it clear that the narrator uses scrupulously mean words effectively, I consider the relationship between the use of free indirect speech and the “scrupulous meanness” in the narrative and I trace the process of the narrator’s distancing oneself from Duffy.

ジェイムズ・ジョイスは1906年5月5日、短編集『ダブリンの人々』¹⁾の出版をめぐって対立していた出版者 Grant Richards に宛てて、作品の意図を伝える手紙を書き送る。彼は「麻痺の中心」としてのダブリンを描くことで、この作品をアイルランドの「道徳史の第一章」²⁾にするつもりであると述べる。そして、その文体を“a style of scrupulous meanness”と形容した³⁾。これは一体何を指すのだろうか。

OED によれば、“scrupulous”はラテン語あるいは古いフランス語起源の形容詞であり、その意味は次の二つに分けられる。一つは、「(道徳的に)正しいことに強い関心を持つている

-
- 1) テキストは James Joyce, *Dubliners*, with Introduction and Notes by Terence Brown (Penguin Books, 1992) を用い、本文からの引用はすべてかっこ内に記した。また、訳出したものはすべて拙訳である。
 - 2) A. Nicholas Fargnoli and Michael Patrick Gillespie, *James Joyce A to Z : The Essential Reference to the Life and Work*, Facts on File, Inc., 1995, p. 60. 彼らは、この部分の原文 “moral” を morale と解釈し、『ダブリンの人々』を道徳的な評価や価値判断を排除した、ダブリン市民の習慣や行動、考え方の歴史と捉えているが、いささか強引に思える。
 - 3) Richard Ellmann, ed., *Letters of James Joyce*, vol. 2, Faber and Faber, 1966, p. 134.

こと」, もう一つは, 「細部にいたるまで慎重かつ正確で用意周到なこと」である。一方, “mean” の起源は古英語あるいはドイツ語である。それは元来「ありふれた」という意味だったが, そこから「位が低い」ことを示すようになり, 次第に「卑劣な, 下品な, 質の劣る」という意味に変容したらしい。この一語を, Wales は, “a deliberate impoverishment of expression”⁴⁾と捉えており, Gottfried はそれを敷衍し, アイルランド文芸復興運動の二流作家の貧弱で卑俗な文体のパロディと捉え, 『ユリシーズ』の文体の萌芽を発見している⁵⁾。また, それを卑劣さを取り, サドマゾヒズムを読む Brandabur などもある⁶⁾。

いずれにせよ重要なのは, この二語の組み合わせから, Beckett 以来何度も確認されてきたジョイス文学におけるテーマと文体の一致, すなわち内容と形式の一体化 (“[F]orm is content, content is form.”) を読み取り⁷⁾, “scrupulous” というラテン語系の単語の高尚な響きと, “meanness” というゲルマン語系の単語のもつ卑俗さの並置に, 相反するものの同居という jocoserious な一面を感じ取ることであろう。

この文体は一般に, 「細心卑小の文体」, 「周到な下品さの文体」などと訳されているが, いずれも “scrupulous” と “mean” の巧妙な組み合わせが生み出す多義性を表象していない。

この論では, ダブリン市民の成熟期を描いた「痛ましい事件」(“A Painful Case”) を例にとり, 『ダブリンの人々』読解のための一つの鍵となる “scrupulous meanness” が, その中でどのように表れているのかを, テーマと文体に着目しながら解明していきたい。

I

「痛ましい事件」は, 老いを迎えてつある男女の不倫の破綻の物語である。主人公のジェイムズ・ダフィ (James Duffy) はダブリンのバゴット・ストリートにある私立銀行の出納係をしている中年の独身男性である。彼の唯一の趣味ならぬ “dissipations” (104) は音楽会へ行くことであるが, ある日彼はロウタンダ座という音楽堂で, エミリー・シニコ (Emily Sinico) という婦人に会う。その後, 三度目の再会を切っ掛けに彼らの交際が始まる。しかし, 彼女には船長である夫とピアノ教師の娘がいた。時が経つにつれて, 「身体的かつ精神的無秩序を示すあらゆるものを嫌悪」(104) し, あくまでも精神的かつ道徳的な交際にこだわるダフィと, 夫から見放されたために生じた空虚感を満たしてくれる相手を求めるシニコ夫人との距離は次第に広がってゆき, 彼らの関係はまもなく終焉を迎える。その後酒に溺れるよう

4) Katie Wales, *The Language of James Joyce*, Macmillan, 1992, p. 38.

5) Roy Gottfried, ““Scrupulous meanness” reconsidered: *Dubliners* as stylistic parody”, in Vincent J. Cheng and Timothy Martin, *Joyce in Context*, Cambridge University Press, 1992, pp. 154-56.

6) Edward Brandabur, *A Scrupulous Meanness: A Study of Joyce's Early Work*, University of Illinois Press, 1971, p. 22.

7) Samuel Beckett, “Dante... Bruno. Vico.. Joyce,” in *James Joyce/Finnegans Wake Symposium: Our Exagmination Round His Factification for Incamination of Work in Progress*, Shakespeare and Company, 1929; A New Directions Book, 1972, p. 14.

になってしまった夫人は、ある晩線路を渡ろうとしている時に、普通列車に撥ねられ即死。確証はないが、その死は発作的な自殺を思わせるものであり、しかも彼らの恋の終わった4年後というアンチクライマックスな最期であった。

この物語の冒頭は、ジョイス作品には珍しい主人公の説明であり、それは伝統的な通俗小説の始まりを思わせる。その芝居のト書きのように圧倒的に長い第一段落の中で、語り手は、彼の部屋の外部と内部を細心の注意を払いながら描写する。

Mr James Duffy lived in Chapelizod because he wished to live as far as possible from the city of which he was a citizen and because he found all the other suburbs of Dublin mean, modern, and pretentious. He lived in an old sombre house, and from his windows he could look into the disused distillery or upwards along the shallow river on which Dublin is built. (103 ; my emphasis)

友人との親好もカトリックへの信仰も持たないというダフィは、「卑俗で現代的でもったいぶった」ダブリンの郊外を嫌う。しかし皮肉にも、彼が居を構えるのは Chapelizod という郊外の村である。Chapel を冠するこの地名は、アーサー王伝説の騎士トリスタンとの恋に落ちるイゾルデの教会を意味するフランス語の Chapel d'Iseult に由来し⁸⁾、そこは彼女の『フィネガンズ・ウェイク』の一応の主人公 HCE の居酒屋の舞台になることは言うまでもない⁹⁾。この宗教性とロマンティシズムとの併存する土地は、またダフィの住む場所としてこの上なく相応しい¹⁰⁾。なぜなら、この物語の一応のテーマは恋愛であり、またそれに臨むダフィの態度は修道僧を思わせるものだからである¹¹⁾。しかし、この物語が中年の男女の遅すぎた不倫の物語であることを思い出せば、ここにもまた皮肉を感じざるを得ない。これは古代ギリシアの叙事詩『オデッセイア』を下敷きにした『ユリシーズ』にも通底する特徴であろう。

“disused distillery” は “mean, modern” の後に続く第二の頭韻をもつ表現である。このウイスキー蒸留所はジョイスの父親の勤め先だったこともある場所だが、そこが1900年頃に

8) Don Gifford, *Joyce Annotated: Notes For “Dubliners” and “A Portrait of the Artist as a Young Man,”* Second edition, Revised and Enlarged, University of California, 1982, p. 81. この Chapelizod に隣接する Phoenix Park も、トリスタンが絶望と狂気の内に引き込んだ場所として、その伝説と密接な関わりがあると言う。

9) Donald T. Torchiana, *Backgrounds for Joyce’s “Dubliners,”* Allen & Unwin, 1986, pp. 165-66. ジョイスがワグナーの『トリスタンとイゾルデ』を聞いたのは、『ダブリンの人々』を書いていたイタリア滞在中であつたらしく、したがって、この短編はジョイスがワグナーの影響を受けた最初の作品という可能性があるらしい。

10) Thomas E. Connolly, “A Painful Case,” in Clive Hart, ed., *James Joyce’s “Dubliners”: Critical Essays,* The Viking Press, 1969, p. 108.

11) 彼の食事の量の少なさ、歩行距離のあまりの長さからも修行中の僧を想起させる。

12) Torchiana, p. 167.

何度か火災に見舞われたという史実を提供し、そのためか、脱力感が感じられるという印象を述べている¹²⁾。脇を流れる“shallow river”は生命の水を汲めそうもなく、延いては spirits を作り出すこともできないだろう。この設定は、ダフィとの空しい恋愛に敗れたシニコー夫人が買いに出かける“spirits”(111)のもう一つの意味を浮き立たせ、「精神的な生活」(105)を送っていることを自負するダフィにこそ、spirit がないというアイロニーを生じさせる。

ダフィの部屋は、絵や絨毯などの装飾物は一切なく、黒と白を基調にした質素な空間である。それは修道院や刑務所の独房を思い起こさせ、彼自身の閉ざされた自己を体現するものとなっている。また、彼は黒い髪と黒い目、さらにはゲール語で黒を示す dubh に由来する名前を持ち、この部屋との調和を乱さない¹³⁾。ダフィを取り巻く色調の中で、とりわけて目を引くのは、“scarlet”の敷物である。しかし、この情熱を示す色は、彼の机の中にしまわれた熟れすぎたリンゴの持つイメージによって打ち消されてしまう。リンゴというものは直ちに、無垢を失うアダムとイブの関係を想起させるが、このリンゴは腐りかけており、無垢を失うなどという新鮮さは感じられない。むしろ、この表現は若さを失った男女の、滑稽な雰囲気さえ漂わせる。哀愁を帯びた不倫の隠喩として捉えられる。

また、ダフィたちの交際を暗示するものとして、ダフィ自ら翻訳を手がけているハウプトマンの戯曲『ミヒャエル・クラマー』も挙げられる。この芝居は、愛の挫折をテーマにしており、彼らの関係を予告していることは明らかである。この二つの作品はテーマだけではなく、部屋の描写もまた対応している¹⁴⁾。ダフィはまた、四脚の籐椅子を揃えているが、Gifford によれば、秩序正しさの特徴としたクラマーの仕事場にも二脚の籐椅子が置かれており¹⁵⁾、ここからは、クラマーとダフィとの同一化と同時に、ダフィの文学的な感化のされ易さの暗示を読むことが可能かもしれない。

本棚に配置された書籍もまた、ダフィの文学的な気取りと同時に、彼の性格を明らかに反映している。本は大きさの順で「強迫神経症」的に¹⁶⁾几帳面に並べられており、その中にはワーズワース全集も含まれている。ワーズワースは20世紀初頭には安全で本質的に大胆ではないロマンティックな詩人と見なされ、アカデミックな体制にも受け入れられており、教会や国家権力に対して従順すぎる詩人であると思われていた¹⁷⁾。また、ヴィクトリア朝の後期にはデラックス版も出されるようになったと言う¹⁸⁾。私立銀行の出納係という立派な地位にあるダフィのことであるから、それを購入した可能性もあるだろう。このような背景をもつ全集を所有す

13) この“dubh”はDublinの語源ともなった語であるが、これは、ダフィがダブリンの街を思わせる茶色い顔をしているという指摘によって、麻痺的なダブリンとの同一化を図られることの傍証になっている。

14) Marvin Magalaner, *Time of Apprenticeship: The Fiction of Young James Joyce*, Abelard-Schuman Ltd., 1959, p. 41.

15) Gifford, p. 81.

16) Connolly, p. 111.

17) Gifford, p. 82.

18) *Dubliners*, p. 282.

ることは、ロマンティシズム/ラディカリズムを志向しつつ、その態度を決定できないダフィの臆病な姿勢をほのめかしているのではないだろうか。

宗教の面で特徴的なのは、彼が Maynooth Catechism をノートの革表紙に縫い込み、隠すように所持していることである。この Maynooth という場所は、カトリックの神学校 Royal College of St. Patrick のあった場所である。19 世紀半ばアイルランドを襲った大飢饉以来、もっとも手近で安定した高給の就職先は教会であった。この学校には、こういう動機で聖職者になった人間たちがたくさんいたと言う¹⁹⁾。すなわち、信仰心の薄い俗物たちの作業を思わせる公教要理を所有していることこそが、信仰心を持たないと宣言し、シニコー夫人との不倫を堂々と続けるにもかかわらず、その一方でカトリックのモラルに束縛され、通常の変愛関係には一歩も踏み込めないという彼の臆病な態度をほのめかしていると受け取れる。Connolly はこのように宗教的でありつつ、宗教的ではない、現代性を嫌いつつ、現代的な、もったいぶったところを嫌うくせに、自分自身がもったいぶっているダフィの性格を「分裂した性格」(“bifurcated personality”)²⁰⁾と呼んでいる。

また、最終場面でのダフィと機関車の同一化はしばしば指摘されることであるが、興味深いことに Torchiana は、冒頭部分の部屋の描写 (lofty, a black iron, a cloth-rack, coal scuttle, a fender, irons, square, hand-mirror, white shaded lamp, etc.) (103) において、すでにシニコー夫人を轢き殺す機関車との同一化が行われていることを指摘している²¹⁾。すなわち、これは Brandabur の認めたダフィの卑劣さを示すものであろう。

II

ダフィの容姿や性格を第三者の目から観察した後、すぐさま語り手は彼の自伝執筆癖に言及する。

He lived at a little distance from his body, regarding his own acts with doubtful side-glances. He had an odd autobiographical habit which led him to compose in his mind from time to time a short sentence about himself containing a subject in the third person and a predicate in the past tense. (104)

この後、この言葉の通り、過去形と三人称の述語で語られるダフィの物語が続くと、読者は語り手をダフィ自身と同一化したくなるかもしれない。しかし、やはりその解釈はナイーヴす

19) 大島豊、『アイリッシュ・ミュージックの森——トラッドからロックのかなたへ』、青弓社、32-34 頁。

20) Connolly, p. 109.

21) Torchiana, p. 168.

22) Suzanne Katz Hyman, ““A Painful Case”: The Movement of a Story through a Shift in Voice,” *James Joyce Quarterly* 19, no. 2, 1982, p. 111.

ぎるだろう。Hyman も言うように、時折ダフィの視点から逸れる個所もあるのだから、基本的な語りは第三者の語り手のものと見なすべきである²²⁾。また、ダフィは時折単文を心の中でまとめる程度であり、そのような能力があるとは思えない。これは語り手が読者に意識されずにダフィの声を語る（騙る）術であり、また読者に仕掛けられた罠と捉えるべきかもしれない。この短編について、Riquelme は、「増してゆく語りの親密度が登場人物の変化するパースペクティブを反映している」²³⁾ と述べ、主人公から独立した語り手が、ダフィの意識あるいは声に絡みついて行くと考えている。

この第三者の語り手によって、ダフィとシニコー夫人との出会いが次のように語られる。

One evening he found himself sitting beside two ladies in the Rotunda. The house, thinly peopled and silent, gave distressing prophecy of failure. The lady who sat next him looked round at the deserted house once or twice and then said :

—What a pity there is such a poor house to-night! It's so hard on people to have to sing to empty benches. (105)

この短編において直接話法が用いられるのはこの一個所のみである²⁴⁾。直接話法は第三者の語り手が登場人物たちの独立した個性を失わせることなく、彼らの会話を活写する方法であるが、この手法を極限にまで切りつめたこのような語りは、主人公以外の人物の個性を薄めて、フィルターとしての主人公の意識の前景化に貢献しているように思われる。

その後、ダフィによるシニコー夫人の印象が三人称の語りをを用いて語られるが、その視座はダフィの目に据えられ、しかもその目は彼女の胸を見据えている。

The eyes were very dark blue and steady.... The pupil reasserted itself quickly, this half-disclosed nature fell again under the reign of prudence, and her astrakhan jacket, moulding a bosom of a certain fullness, struck the note of defiance more definitely. (105)

23) John Paul Riquelme, *Teller and Tale in Joyce's Fiction: Oscillating Perspectives*, John Hopkins University Press, 1983, p. 115.

24) この次の作品「蕁の日の委員会室」では、全体を支配していた直接話法が消滅に向かい、“Mr Crofton said that it was a very fine piece of writing.” (133) という最後の一行で、最初で最後の間接話法が用いられる。この文は登場人物の一人によって読み上げられる無冠の帝王パーネルを称える詩の空虚さと、その詩に対する語り手の距離を効果的に言い表すものである。この短編の中の唯一の直接話法はそれと明らかに響き合っている。

また、この二行は、音楽堂の人の入りの少なさを嘆く夫人の言葉であるが、“poor house”を二人の関係の不毛さ、不幸を予告する言葉と取れば、なんと彼らの交際の始まりに相応しい皮肉な幕開けであろう。

その後、シニコー夫人と三度目の再会を果たしたダフィは、彼女と逢瀬の約束を取り付ける。しかし、それに対する反応は、喜びではなく、“She came”. (106) というあまりにも無感動なものである。あたかもそれは抑制された感情と他者を冷淡に突き放す性格を持つダフィ自身の言葉を引用しているかのようであり、語り手とダフィとの親密度の深まりが感じ取れるのではないか。

その親密度が深まるにつれ、語りはダフィの文学的な気取りを反映するようになる。独身の中年男性と、夫も娘もある中年の夫人との交際という二人の不釣り合いな関係を示す際に、“incongruity” (106) という単語が用いられる。一見何の変哲もない言葉のようにも思えるが、これは John Donne の詩からの引用の可能性もある²⁵⁾。また、フランス語の *assister* の意味で使われる “assisted at” (106) という、シェイクスピアの時代の古い用法や、“discontinued” (106) や “betokened” (104) などの堅苦しい言葉使いもその例として挙げられるだろう。また、アイルランドの社会主義連盟の会合での会員の議論を、ダフィは “timorous” (107) と形容するが、これも古語の意味 (“causing fear or dread; dreadful, terrible”) で使われている可能性がある。労働者の賃金に対する執着が法外であったことや、このような語り手の嗜好を考慮すると、この可能性も否めない²⁶⁾。

一方、ダフィの行動に見られる気取りは、当時珍しかったラガー・ビールを飲んでいることにも表れている。また、携帯している丈夫なハンバミの杖 (“stout hazel”) は伝統的にアイルランドの詩人の持ち物であったが、アイルランドの伝統を復活させようとした文芸復興運動の文学者たちのファッションであった可能性もある。また当時は今ほどは評価されていなかったモーツァルトを好む、彼の興味も独特である²⁷⁾。

このような高尚な語彙や表現、趣味とは対照的に、卑俗な感覚も同居している。この感覚はまず、語りにおける次のようなアイルランド訛の中にも表れている。

She asked him why did he not write out his thoughts. (107)

The girl came over to ask was his dinner not properly cooked. (109)

フランス語的な用法や高尚な語彙が散りばめられているページにこのような表現が用いられていることには、ダフィの卑しい一面を反映した語りが感得でき、また彼に対する皮肉も窺える。

こそこそするのが嫌いなダフィはシニコー家を訪れ、一家と懇意になる。彼女の夫は当然な

25) *James Joyce's "Dubliners": An Annotated Edition*, Introduction, Notes, and Afterwords by John Wyse Jackson and Bernard McGinley, Sinclair-Stevenson, 1993, p. 97.

26) Jackson, p. 98.

27) Jackson, p. 96.

がら、ダフィが娘との婚約を取り付けたいのだろうと考え、彼の出入りを快く許す。語り手はダフィが直接聞いたかもしれない妻に対する夫の心情を、次のような言葉に置き換える。

He had dismissed his wife so sincerely from his gallery of pleasures that he did not suspect that anyone else would take an interest in her. (106 ; my emphasis)

「快楽のギャラリー」という表現や、老いた夫人を相手にするなどとは誰も思わないだろうという指摘自体が、読者の笑いを誘う。また逆に、ダフィ自身のもったいぶった表現を語り手が引用したものと考えれば、さらに滑稽さが増すだろう。

また、ポルノ小説の言説を思わせる次の二つの引用も、ダフィの卑俗さを暴露しているように思える。

Little by little he entangled his thoughts with hers. He lent her books, provided her with ideas, shared his intellectual life with her. She listened to all. (106)

He went often to her little cottage outside Dublin ; often they spent their evenings alone. Little by little, as their thoughts entangled, they spoke of subjects less remote. Her companionship was like a warm soil about an exotic. Many times she allowed the dark to fall upon them, refraining from lighting the lamp. The dark discreet room, their isolation, the music that still vibrated in their ears united them. (107 ; my emphasis)

ふたりの交際は、思想あるいは考え方を話題にし、関係を深めていくという中年の恋らしからぬものである。それを表現する際に、ダフィの夫人への欲望を示す「絡め合う」という濃厚な表現が二度用いられる。このようにシニコー夫人との関係が深まるに連れて、語り手との親密な関係もダフィの内奥にまで深まっていき、語り手はダフィの抑圧された欲望をさらけ出していく。彼が欲望を抑圧する早い段階の例として、Wachtel は“dissipations” (104) を挙げているが²⁸⁾、ここではそれは“less remote”という遠回しな表現に表れている。

ダフィとシニコー夫人との関係が言い表される際、“intimate” (106), “meetings” (106), “the lady’s society” (106), “discourses” (107), “[h]er companionship” (107), “interview” (108), “intercourse” (108) という表現が用いられる。最初の単語は“Pertaining to the inmost thoughts or feelings ; proceeding from, concerning, or affecting one’s inmost

28) Albert Wachtel, *The Cracked Lookingglass : James Joyce and the Nightmare of History*, London and Toronto : Associated University Press, 1992, p. 49.

self ; closely personal.” (OED) という意義に合致し、第一義的にはダフィの感情を考慮すれば、彼自身の思想や主義がシニコー夫人に伝わったことを表しているのかもしれない。しかし OED の定義を見れば、この語は当時としても、肉体的な接触を含む深い関係のときに使う言葉であったことがわかる。これらの単語の使い方に、ダフィの欲望の抑圧を反映する語りを読み取ることができる。さらに、それは自分自身から距離をおいた次のような表現にも体现されている。

He allowed himself to think that in certain circumstances he would rob his bank but, as these circumstances never arose, his life rolled out evenly—an adventureless tale. (105 ; my emphasis)

このような文脈におくと、先に引用した “One evening he found himself sitting beside two ladies in the Rotunda.” (105) という文も、いささか不自然に感じられる。なぜならこの音楽堂は人の入りの少ないゆえ、わざわざ女性たちの側に行かなくても十分に座る余地があるのだから、仮に、ダフィが自ら彼女たちに近づいていったことを示しているのだとすれば、ポルノ小説のパロディすら読み取れ、ダフィの下品さを露呈する格好になっているように思える。

III

18 世紀以来の伝統的小説の系譜の中にある小説は、第三者としての語り手が、客観的立場を確保しながら、登場人物たちの個性を失わせない直接話法を用いて、彼らの会話を再現しながら、物語を進行させて行く。しかし、その合間に、語り手は自分自身の価値判断や状況のまとめを差し挟むため、読者は語り手の存在を常に意識せねばならず、作り物の感覚が絶えずつきまとうことになる。一方、戯曲では、戯曲家は、ト書きの中に自分の存在を強く主張することもあるが、通常は物語の外部に立ち、伝統的小説の語り手以上の客観性を維持しつつ、人物たちの会話を直接話法によって筆写する。したがって、観客は、第三者としての戯曲家の価値判断を媒介せずに、登場人物たちの声を肉声に移し替える役者たちの世界に直接寄り添うことが許されており、観客は自分なりの読みによって、作品の意味を引き出したり、特定の人物に共感することができるため、そこには必然的に現実感が生まれる。

その両者とも性格を異にするこの「痛ましい事件」には、先述したように直接話法はたった一個所しかなく、読者は彼女の視点に立つことも許されておらず、もっぱら語り手の声に変換されたシニコー夫人の声しか聞くことができない。そして、この語り手は伝統的な小説のそれとは異なり客観性も乏しく、ダフィという特定の人物の意識を強く反映しすぎている。

このような語りに、さらに自由間接話法（描出話法）が絡み合っていく。その最初の例シニコー夫人による自己紹介である。

Her name was Mrs Sinico. Her husband's great-great-grandfather had come from Leghorn. Her husband was captain of a mercantile boat plying between Dublin and Holland ; and they had one child. (106)

自由間接話法とは、登場人物の言説をその人物に合った語彙を用いながら、「と彼女は思った」というような伝達節を省略し、三人称、過去形に移し替えて描写する比較的新しい話法である。この箇所を読む読者は、第三者の語り手によって彼女の情報がまとめられるよりはずっと深く、シニコ夫人の意識の中に入り込んだような印象を受けるかもしれない。しかし、直接話法のような臨場感はないし、どこか冷たく突き放されているような印象を受けるはずである。そしてこの語り手に反映した距離感こそ、ダフィの彼女に対する距離感なのである。この距離感を感じるによって読者はさらに深く、ダフィの意識の中に引きずり込まれてしまう。語り手はこのような自由間接話法を用いることによって、主人公との親密さと、偽装の度合いをさらに深めてゆく。

しかし、ダフィに対する親密な感情をシニコ夫人が強く打ち出していくにつれて、彼は魂の癒すことの出来ない孤独 (loneliness) を主張する “strange impersonal voice” (107) を聞く。「自分の肉体から少し離れたところにいる」(104) 分裂症的なダフィ自身は、この声を、もうひとつの冷淡で卑劣でサディスティックな人格の声と解釈しているようであるが、それは、この解釈は彼の間違いかもしれない。この声はダフィの声ではなく、非人称的な語り手の声であり²⁹⁾、ここで語り手が周到にダフィの姿に偽装していたことを明かしていると捉えるべきではないだろうか。

4年後、ダフィはシニコ夫人との別れによって心を掻き乱されることなく、普段通りの生活を送っていた。ただ本棚には、超人思想を説くニーチェの本が2冊が加わっていた。これは彼の隠遁者の姿勢をさらに補強するものであろう。

仕事帰りに、ダフィはジョージズ・ストリートで慎ましい夕食を取った後、食後のデザートとしていつものように夕刊を読んでいると、“A Painful Case” という副題のついた死亡記事に目が留まる。それはこともあろうにシニコ夫人の死亡記事であった。彼はあまりの衝撃に、食事も喉にとおらず、食堂を後にする。自宅までの帰り道の描写はS音の頭韻および多用によって、寒々とした印象を与える。

He walked along quickly through the November twilight, his stout hazel stick striking the ground regularly, the fringe of the buff Mail peeping out of a side-pocket of his tight reefer overcoat. On the lonely road which leads from the Parkgate to Chapel-

29) デイヴィッド・ロッジ、『小説の技巧』、柴田元幸、齊藤兆史訳、白水社、1998年、66頁。ロッジは、自由間接話法は「読者にとって間近に読み取れそうな意識の描写を可能にするが、作者の声を完全には拭い去りはない」と述べている。

izod he slackened his pace. His stick struck the ground less emphatically, and his breath, issuing irregularly, almost with a sighing sound, condensed in the wintry air. (109; myemphasis)

こうして語り手はダフィとの距離を完全に保った後、決まり文句に満ちた事実報告のみの新聞の死亡記事を提示することによって、彼女の死の物語の表層を伝える。それはシニコー夫人の自己紹介が自由間接話法に書き換えられたときの効果と同じ効果を生じさせ、同様にまた、このメロドラマの結末に対して、センチメンタルな感情移入を拒むことを読者に対して要請する。

この記事を何度も読み返した末に、ダフィの口をついて出た言葉を、語り手はさらに自由間接話法を用いて描写する。まず、彼女の死を“commonplace vulgar death” (111) と表現し、新聞の陳腐な文句に不満を述べた後、彼はシニコー夫人によって自らの品位を汚されたことに対する怒りを露わにする。そして酒に溺れ、“the spualid tract of her vice, miserable and malodorous” (111) を徘徊する墮落した夫人の姿を想像する。その中で語り手は、他者への気遣いの無いダフィの本性を暴露する。その結果、読者とダフィとの距離はますます拡大する。

また、このような状況においても、冷静を装おうとするダフィは気取りに満ちた表現を使うことによって、逆説的に、彼の卑俗さと卑劣さを暴露する。OED によれば、“malodorous” という単語は 1850 年初出の比較的新しい語である。これはフランス語の“malodorous”の英語化であり、高尚な感覚を持っているように思える。また、カンマの後二つの形容詞を添える表現方法も気取りを感じさせる。

ダフィの子供っぽい自己弁護は続き、さらにサディスティックな声は強さを増していく。

Just God, what an end! Evidently she had been unfit to live, without any strength of purpose, an easy prey to habits, one of the wrecks on which civilization has been reared.... He had no difficulty now in approving of the course he had taken. (111-12)

語り手は自由間接話法によってダフィの心の中の声と絡み合うことによって、一体化を図るが、それにつれて、読者は一層ダフィに対する共感を失っていく。彼はシニコー夫人の死にいかなる責任も感じず、さらには自分をも汚したと罵り、まるで未熟な「超人」のように自分自身を肯定する。しかしその肯定はたちまちぐらつく。

居ても立ってもいられなくなったダフィは、外套を羽織り、チャペリゾッド橋のパブへ行き、“hot punch”を注文する。その飲み物は文字どおり彼が受けた衝撃を象徴するかのようである。店の主人は彼に対してへつらうように(“obsequiously”) (112) 振る舞う。この単語はラテン語あるいはフランス語経由の言葉であるが、興味深いことに、“obsequy”という葬式

を表す言葉を含み、シニコー夫人の死亡記事を読むダフィを語り手が当てこする表現となっている。

パブには5, 6人の労働者が俗な話題で盛り上がっている。彼らは時折唾を吐き、その上に、床に敷き詰められているおがくずを足でかける。しばらくしてこの下品な連中が出て行くとダフィはまだ打ちのめされ方が足りなかったかのように、もう一杯パンチを注文するが、それを飲むにつれてダフィは気分が悪くなっていく。

He asked himself what else could he have done. He could not have carried on a comedy of deception with her ; he could not have lived with her openly. He had done what seemed to him best. How was he to blame? Now that she was gone he understood how lonely her life must have been, sitting night after night, alone in that room. His life would be lonely too until he, too, died. ceased to exist, became a memory—if anyone remembered him. (112-13)

アイルランド訛の三人称の語りの後に、自由間接話法、通常の三人称の語り、自由間接話法と素早く切り替わるが、これは語り手の声とダフィの声と読者の存在を一気に一体化させ、読者の中に残っていたかもしれないダフィに対するわずかな共感を取り戻すことを求めているかのように思える。しかし、すぐさま次の段落で三人称の語りを復活させることで、語り手は読者にダフィの意識の占有する物語空間から離れる準備させる。

パブを出たダフィはフィーニックス・パークへ向かい、背の高い不気味な (“gaunt”) (113) 木々の間の小道を歩く。すると、時折シニコー夫人の声が彼の耳に触れ、彼女の手が彼の手に触れるのを感じ、彼は道徳観の崩壊を意識し始める。その後、公園の外れにあるマガジン・ヒルまではるばる登ってゆくが、そこで寝そべる男女の姿を見て、自分の品行方正な生き方を省み、自分は “outcast from life's feast” (113) になっていたのではないか、つまり人生の真の喜びを忘れてしまっていたのではないかと考える。そしてシニコー夫人の人生と彼女の幸せを否定してしまったことに対する反省の念を示す。しかしそれも一瞬にすぎず、すぐさま彼はダブリンに向かって蛇行する灰色に輝く川に目をやる。初めに自由間接話法によってダフィの心情が吐露された後、次の三人称の語りが続く。

Beyond the river he saw a goods train winding out of Kingsbridge Station, like a worm with a fiery head winding through the darkness, obstinately and laboriously. It passed slowly out of sight ; but still he heard in his ears the laborious drone of the engine reiterating the syllables of her name. (113 ; my emphasis)

ここで目立つのは同じ単語の単調な繰り返しである。しかもジョイスは最終稿において、反復を強調したらしい³⁰⁾。この反復は宗教的言説の特徴でもあり、また表現の貧しさを示す表現方法でもあるが、ここではダフィのパニックを示すのに最も効果的な方法となっている。またこのときダフィの目に映っているのは、まるで子供の描いた毛虫のような機関車である。この隠喩はたびたび匂わされてきたダフィの自己中心性という幼稚さを明かすものなのであろう。

このショックにもかかわらず、老いを迎えつつあるダフィは「来た道をまた戻り」(113)、シニコー夫人の存在や、彼女によって受けた衝撃的な経験自体を子供のように忘れてしまう。最終的にはシニコー夫人の声さえも感じることが出来なくなり、ただ沈黙の世界だけが彼を取り囲む。ジョイス作品において、沈黙というのは概して、読者によって積極的に埋められるべき時空間となっており、特に「姉妹」の豊穡なる沈黙はその一例としてよく知られている。それとは異なり、この沈黙は活動の完全な停止であり、ダフィを彼自身の意識の中に隠蔽し、彼の人生におけるすべての肯定的な可能性を消去し、彼の存在を一切の空虚へと導く語りの一行為に思える。

He waited for some minutes listening. He could hear nothing : the night was perfectly silent. He listened again : perfectly silent. He felt that he was alone. (114 ; my emphasis)

かくして scrupulous で mean なダフィ自身の麻痺的な精神状態を反映する scrupulous meanness の文体は、精神的な死としての沈黙へと導かれる。

(本学非常勤講師)